

# 第3章 動詞と文型

## ▲. 文の要素

### 1) 文を作る上での大切な要素と文型

文の意味を完成させるために必要なものに、次の4つがある。

主語(S) 述語(V) 目的語(O) 補語(C)  
Subject Predicate Verb Object Complement

※ この4つは、文を作る上で大切なものであり、『要素』と呼ばれる。

※ この4つの組み合わせにより、文は、次の5つの文型に分けられる

- 第1文型 SV
- 第2文型 SVC
- 第3文型 SVO
- 第4文型 SVOO
- 第5文型 SVOC

主語と述語については、別に学習することはないが、目的語と補語は、ある程度理解しておいた方がよからう。

### 2) 目的語(O)

「何を」または「誰に」に相当するもので、述語動詞(V)の後に続けていくものである。

文を作っていく場合、動詞の中には、SV だけでは文の意味が分からないものが非常に多い。例えば、

I saw. 私を見た(会った)。

と言っても、「何を見た」のか、「誰に会った」のか分からない。この文を聞く側に立ってみれば「何を見たのか」、または「誰に会ったのか」知りたくなるのは当然であろう。ということは、しゃべる側は、「何を」または「誰に」まで言う責任がある。つまり、

I saw the dog. 私はその犬を見た。

I saw Taro. 私はタローに会った。

と言って初めて、聞く側は相手が何を言いたいのか理解出来るのである。このようにして出来た文が、『第3文型 SVO』である。第3文型 SVO を作る動詞は非常に多く、次に挙げるのはほんの一例である。

【例】	I	love	Nancy.	私はナンシーを愛している。
	I	can eat	an apple.	私はりんごを食べることができる。
	I	bought	a new car.	私は新しい車を買った。
	I	will call	Tom.	私はトムに電話するつもりだ。
	S	V	O	

ここで、注目してほしいのは、主語(S)と目的語(O)の関係である。上の例文の、どれをとってみても、目的語は、主語(私)とは別な物(人)である。これが、目的語の特徴である。

《目的語の特徴》

- ① 「何を」または「誰に」に相当する。
- ② 名詞または代名詞である。
- ③ S ≠ O である。

### 3) 補語(C)

「～である、～になる、～に見える」と、主語が何なのか、どんな状態なのかを説明するものである。

be 動詞で考えてみよう。

He is.                    彼は である。

と言っても、聞く側はさっぱり意味が分からない。「彼がどうなのか」知りたくなる。そこで、

He is a teacher.                    彼は先生である。

He is happy.                    彼は幸せである。

とすると、文の意味がはっきりする。

さて、ここで a teacher や happy に注目して、これが先に学習した目的語かどうか調べてみよう。

目的語なら、「何を」または「誰に」でなくてはならないし、また、名詞または代名詞でなくてはならないが、a teacher も happy も「を」や「に」とつながらないし、teacher は名詞であるが、happy は形容詞である。目的語である、と判断するためには、上で述べたあげた特徴をすべて満足させなければならないが、どうもすべて満足させているとは言えないようだ。

また、目的語といえない、決定的な点は、目的語が主語(S)と全然別な物(人)であるのに対して、teacher も happy も、主語(彼)に関する事なのである。もう一度例文を出して、比較・確認してみよう。

He is Tom.    彼はトムです。                    ……………①

He knows Tom.    彼はトムを知っています。……………②

上の2つの文中の、he と Tom の関係を見てほしい。①の文では、明らかに he と Tom とは同一人物であるが、②の文では、he と Tom とは別な人である。ここに、目的語とは別にしなければならない決定的な理由があるわけである。ただ、文の意味を完成させるためには、目的語と同様に、必要不可欠な、大切な語であることは間違いない。そこで、目的語と区別して、補語(Complement)と呼ぶことにし、このようにして出来た文型が、『第2文型 SVC』である。

第2文型 SVC を作る動詞は、be 動詞のほかに、一般動詞の中にもいくつかがあるが、中学では、become(～になる)と look(～に見える)を習っている。

そのほかにも、get(～になる)や keep(～のままである)などがある。

《第2文型 SVC を作る動詞》

become, get, look, keep, etc

【例】	She	is	Nancy.	彼女はナンシーです。
	She	became	a teacher.	彼女は先生になった。
	She	looks	young.	彼女は若く見える。
	She	became	happy.	彼女は幸せになった。
	It	got	dark.	暗くなった。
	She	kept	quiet.	彼女は静かにしていた。

《補語の特徴》

①主語(S)が何なの、どんな状態であるかを表す。

※主語が名詞のときは、S = Cと考えてよい。

②名詞または形容詞が続く。

※ look, get, keep は形容詞だけが続く。

[注] 第2文型 SVC を作る動詞はもう少しあるが、第3文型 SVO を作る動詞に比べるとほんのわずかである。

以上、主語(S)・述語(V)・目的語(O)・補語(C)の4つの要素について学習してきたが、もう1度くり返すと、この4つの中でもとりわけ大切なのが、述語(V)の働きをする動詞である。どのような動詞を述語とするかによって、目的語が必要になる場合と、補語が必要になる場合とが出てくるし、また、それによって、文型が第1文型 SV・第2文型 SVC・第3文型 SVO と、分かれていくのである。

いずれにしても、文はまず、SV から始まり、C か O が続き、そのほかの、場所や時間などは、その後が続けていくのが、文の作り方である、と考えてほしい。

★ 練習問題 1 をせよ。

## B. 他動詞と自動詞

### 1) 他動詞と自動詞

目的語(O)を必要とするかしないかで、動詞は他動詞と自動詞に分かれる。

- ┌ 他動詞……………目的語を必要とする動詞
  - ※第3文型 SVO・第4文型 SVOO・第5文型 SVOC を作る。
- └ 自動詞……………目的語を必要としない動詞
  - ※第1文型 SV・第2文型 SVC を作る。

## 2) 自動詞と前置詞

第 1 文型 SV を作る動詞は、元々後に語を必要としないが、次のように後に語を続けたい場合も出てこよう。

「私は(通りを)歩いた。」

ところが、下のように述語動詞(V)の後に直接続けることは出来ない。

I walked the street. **これはマチガイ!!**

なぜならば、元々語を必要としないから、直接名詞を続けても『を』や『に』の意味が出ないのである。そこで登場してくるのが、前置詞である。つまり、

I walked **along** the street. 私は通りを(通りに沿って)歩いた。

として、正しい文となる。しかも、前置詞はいつも along とは限らない。状況によって、in, to, on などと使い分けていかねばならない。

もう少し例文を出しておこう。

【例】	I	walked	<b>in</b>	the park.	私は公園を歩いた。
	I	looked	<b>at</b>	the dog.	私はその犬を見た。
	The Gokase	runs	<b>through</b>	Nobeoka.	五ヶ瀬川は延岡を貫流している。
	S	V	前置詞		

これに対して他動詞は、後に名詞を直接続けても、自動的に「を」や「に」の意味が出る。ここに、自動詞との大きな違いがある。

【例】	I	played	the guitar.	私はギター <u>を</u> 弾いた。	
	I	saw	the dog.	私はその犬 <u>を</u> 見た。	
	I	called	the girl.	私はその女の子 <u>に</u> 電話した。	
	S	V	O		

英文は SV から始まるのは分かっているね。つまり、英作する時に、使う述語動詞が「自動詞か他動詞か」と意識を働かせる習慣をつけると、後に前置詞が必要な場合のミスがかなりなくなる訳だ。

これから、高校英語を学習するにおいて、どんなに複雑になろうとも、この基本は変わらない。

## 3) 自動詞・他動詞で間違いやすい動詞

自動詞・他動詞で、間違いやすい動詞を初級レベルでいくつか知っておこう。

### ① 自動詞で、他動詞と間違いやすい動詞

talk(話す), speak(話す、演説する), get(着く), start,  
wait(待つ、仕える), reply(答える), etc

※ これらの動詞を述語に使うときは、必ず後に前置詞が必要となる。

talk(speak) with(to) 人 + about ~, get to ~, start from ~,  
wait for ~ (~を待つ), wait on ~ (~に仕える), reply to ~

② 他動詞で、自動詞と間違いやすい動詞

visit, reach(着く), leave(～を出発する), discuss(議論する),  
attend(出席する), enter(入る), marry(結婚する), etc

★ 練習問題 ② をせよ。

## C. 文型判断の仕方

### 1) 主語・述語・補語・目的語になる品詞

※名詞・動詞・形容詞などを総称して『品詞』という。

冒頭からの学習でほぼ理解できたであろうが、主語・補語・目的語になる品詞は、基本的には「名詞」と「形容詞」であり、述語になる品詞は「動詞」である。

┌	主語…………名詞(代名詞)	<u>Tom</u> is a good student.
	述語…………動詞(be 動詞か一般動詞だね)	
	He <u>is</u> happy.	He <u>plays</u> tennis.
	└ 補語…………名詞(代名詞)と形容詞	
	He is <u>Tom</u> .	He is very <u>busy</u> .
└	目的語……名詞(代名詞)	I know <u>Tom</u> .

### 2) 修飾語

主語・述語・補語・目的語は、文の意味を完成させるために必要不可欠な、大切な語であり、そこで、文の主要素と呼ばれる。

それに対して、『修飾語』はあくまで「カザリ」であり、それがなくとも最低、文として成立するところに主語・述語・補語・目的語が存在する。こここのところの理解が文型判断のキメ手と言ってもよい。

次の例文を見てみよう。

【例 1】 Tom studied English very hard last night.

S     V     O            修飾語句 修飾語句

【例 2】 Tom talked with Nancy about the matter.

S     V   修飾語句①   修飾語句②

【例文 1】は問題ないと思うが、【例文 2】はどうかな？ 前ページで「自動詞と前置詞」の関係について学習したが、修飾語①は with で、修飾語②は about という前置詞でつながれたものだ。つまり、talk は本来自動詞だということだ。言葉を換えて言えば、

Tom talked.       トムは語った。

でもピリオドが打てる性質の動詞なのである。もう少しクドク言えば、

Tom and Nancy talked.       トムとナンシーは語り合った。

They are talking.               彼らはおしゃべりしています。



と言って、文の意味は完成される。

このようにして出来た文型が『第4文型 SVOO』である。

しかも、この文型では、「何を」と「誰に」の順序が決まっている点に注意してほしい。必ず、「誰に」・「何を」の順である。

【例】	I	washed	the car.	I	gave	Taro	the cake.
	I	ate	the cake.	I	show	Sam	my album.
	I	love	the girl.	I	teach	you	English.
	S	V	O	S	V	IO(誰に)	DO(何を)

[注1] 「何を」に相当する目的語を、直接目的語(Direct Object)といい、「誰に」に相当する目的語を、間接目的語(Indirect Object)という。

[注2] 第4文型 SVOO を作る動詞には、次のものがある。

give, show, teach, lend, send, ask, tell, etc

これはわざわざ覚える必要はない。考えてごらん。この動作を実際にしようとする時、「誰に」と「何を」が揃っていないと出来ないことはすぐ分かるだろう？

この動詞を使って何かを伝えようとするれば、必然的に文の型が決まるんだね。元々、言葉とは神様が人間に使えと言って与えたものではない。相手に何かを伝達しようという思いがどの声帯を進化させて人間が作ったものだ。つまり、文型が最初からあったのではなく、述語として使う動詞によって、様々な思いが伝わるか伝わらないかで自ずと文の型が決まっていたわけだ。必要性から言語は発達してきた訳だ。

ただ、ここで、say, tell, talk, speak の4つの使い分けだけは説明しておこう。

- |       |    |   |
|-------|----|---|
| say   | …… | ・ 第3文型 SVO を作る(声を発するだけ)<br>・ 「誰に」を続けるときは必ず《say to ~》の形になる。                                  |
| tell  | …… | ・ 第4文型 SVOO を作る   |
| talk  | …… | ・ 基本的に第1文型 SV しか作らない。<br>つまり、後に何か語を続けるときは必ず前置詞が必要ということだ。<br>《talk with(to) + 人 + about ~》   |
| speak | …… | ・ 基本的に talk と同じ使い方をする。第3文型 SVO は後に<br>言語(英語とか日本語)を続けるときのみ<br>《speak with(to) + 人 + about ~》 |

## 2) 第 4 文型 SVOO から第 3 文型 SVO へ

第 4 文型 SVOO は、「誰に」「何を」の順序であることは学んだばかりだが、日常会話の中では、つい「何を」を先に言うてしまうことはないだろうか。話し言葉の場合、取り消しがきかないよね。そうするとこの文型は非常に不便な文型ということになる。あるいは、何かの理由でそちらを先に言いたい時もあるのではないだろうか。

実は、それはそれで言い方があるのだ。それが次の方法だ。

【例】 私はナンシーにケーキをあげた。

I gave Nancy the cake.

I gave the cake to Nancy.

[注 1] この to は、前に学習した通り、正しい順序でないために「に」の意味が出ず、前置詞 to でつないで「に」の意味を出しているわけだ。

[注 2] 「何を」を先に置くと、文型は第 3 文型 SVO となる。前にも学習した通り、前置詞があると文型はそこまで！ということだ。

## 3) SVO + 前置詞

続ける前置詞は、to のほかに for や of を使うものもあり、それは第 4 文型 SVOO を作る動詞の性質の違いになる。大きくは次のように 3 つに分類される。

- ① give 類 …… 《to》  
give, send, show, lend, tell, bring, teach, etc
- ② make 類 …… 《for》  
make, buy, find, get, cook, etc
- ③ ask 類 …… 《of》  
ask, envy(うらやむ)

①グループ、②グループの動詞は暗記する必要はない。その違いを理解しておけば、その場で分類できる。さて、その違いであるが、

### ①グループの動詞

「誰に」と「何を」の目的語が 2 つそろって行える動作であり、基本的に第 4 文型 SVOO しか作らない動詞といえる。

### ②グループの動詞

基本的に、「何を」という目的語だけで文の意味が完成できる動詞であり、「～してやる」という意味で用いるときに第 4 文型も作れる動詞といえる。

次ページの例文を見てごらん。

上 4 つが①グループの動詞だな。SVO だけでは意味が完成されないね。ところが、次ページの 4 つの文は SVO でも SVOO でも意味は完成されている。make で話をすれば、左の SVO の文の make は「～を作る」という意味で使われているが、右の make は「…に～を作ってる」という意味で使われている。言葉を換えれば、①グループの動詞は意味がただ 1 つしかなく SVOO しか作れないが、②グループの動詞は意味が 2 つ以上あり、その意味によって SVO でも SVOO でも作れる、ということだ。



【例 1】	I	gave	a model car.	×	I	gave	him	a model car.	○
	I	sent	the pen.	×	I	sent	him	the pen.	○
	I	showed	the album.	×	I	showed	him	the album.	○
	I	lent	my car.	×	I	lent	him	my car.	○
	I	made	a model car.	○	I	made	him	a model car.	○
	I	bought	the pen.	○	I	bought	him	the pen.	○
	I	found	the job.	○	I	found	him	the job.	○
	I	cooked	the fish.	○	I	cooked	him	the fish.	○
	S	V	O		S	V	IO	DO	

[注 1] そして、この違いが前置詞の違いとなって現れるのである。つまり、②グループの動詞は《for》をとるのである。

【例 2】  
 [ I gave Taro the book.                    [ I bought Taro the book.  
 [ I gave the book to Taro.            [ I bought the book for Taro.

[注 2] ③グループの動詞は特殊で、《of》をとる。これが大学入試頻出のものになる。

【例 3】  
 [ The student asked her a question.  
 [ The student asked a question of her.

[注 3] ここで、do の特殊な使い方について1つ頭に入れておこう。

do は、中学 3 年間で「～する」という意味以外何もなかった動詞だったが、実はほかにいくつか意味を持ち、その一つとして give と同じく「～を…に与える」という意味があり、第 4 文型を作れることだ。

【例 4】 This medicine will do you good.  
 S                    V                    O                    O

この薬はあなたに効くでしょう。(この薬はあなたに効果を与える)

※ この文における good は名詞で「効果」という意味。

★ 練習問題 4 をせよ。

## E. 第 5 文型 SVOC

name で考えてみよう。

name は他動詞であり、「何を」または「誰を」という目的語(O)を必要とするが、

I named the dog.                    私はその犬を名づけた。

では、「どう名づけたのか」分からない。そこで、

I named the dog Taro.            私はその犬をタローと名づけた。

とすると、文の意味が完成される。

このようにして出来た文が、『第 5 文型 SVOC』である。

【例】	┌	I	named	the dog	Taro.	私はその犬をタローと名づけた。
		I	call	the dog	Taro.	私はその犬をタローと呼んでいる。
		I	made	my son	a doctor.	私は息子を医者にした。
		S	V	O	C	

[注1] SVOCとSVOOの違いは、次の2つの文を比べるとよく分かる。

I	named	<u>the dog</u>	<u>Taro.</u>	
		O	C	O(その犬) = C(タロー)
I	gave	<u>the dog</u>	<u>some food.</u>	
		IO	DO	IO(その犬) ≠ DO(食べ物)

つまり、2つの語が同一か、そうでないかで判別できる!!

※ SVCの補語を、S=Cであることから『主格補語』といい、  
SVOCの補語を、O=Cであることから、『目的格補語』という。

[注2] 第5文型SVOCを作る動詞

call, name, make は中学で学習済みだが、今回次の3つを加えて覚えよう。

┌	keep(～を…にしておく)
	leave(～を…にしておく)
	find(～が…だと分かる)

[注3] 第2文型SVC, 第5文型SVOCのCには、発展していくと、名詞や形容詞のほかにも、  
原形動詞・現在分詞・過去分詞も置ける文を学習することになるが、それはもう少し後で  
学習する。

## 《最後に》

主語・補語・目的語には、発展していくと、不定詞や動名詞などの句、そして、接続詞でつな  
いだ節も考えていかなければならない。

<u>Studying French</u> is very difficult.	(S)	動名詞句
I finished <u>studying French</u> .	(O)	動名詞句
I started <u>to study French</u> .	(O)	不定詞句
I think <u>that he is busy</u> .	(O)	that 節
His story is <u>to collect stamps</u> .	(C)	不定詞句

※ 『句』とは、2語以上でひとつの意味を表すもの。『節』とは、ある文の中に、SVの関  
係をもつ文を接続詞や関係代名詞を使って組み込んだもの。

以上で、5つの文型についての基本的学習は終わるが、文を作っていく場合、最初から文型  
に当てはめるのではなく、使う述語動詞の意味に注目すれば、自然と文型が決まっていくのだ、  
ということを忘れないように。そういう意味では、文型を理解するためには、動詞が最も大切  
なキーワード、と言える。

★ 練習問題 5, 6 をせよ。